



32才で早逝した保莉実さんが遺した「ラディカル・オーラル・ヒストリー」

常識破るアボリジニの「歴史実践」

「どうか僕とつながっててください。祈りでもいい、ただ思い出だけでもいい、会話の中で登場するのもいい。どうか僕を孤独にしないでください。人とのつながりの中で今の僕があり、今の僕が支えられています」

それが、我が友、保莉実さんが国内外の大勢の友人にメルボルのホスピスから発した最期のメールとなった。その数日後、彼は9カ月に及ぶ壮絶なガンとの闘病生活にピリオドを打ち、この5月10日、静かに息を引き取った。まだ32歳の若さだった。

死後知ったが、亡くなる数日前まで病床で原稿を書き続けていた。彼は3年前、私が在籍中のオーストラリア国立大学から博士号を授与された。その分厚い博士論文を日本語に翻訳し出版するための根気のいる作業だった。通常は耐えがたい痛みに襲われる末期ガン患者の単行本執筆作業は、よほどの強い意志、情熱、知力を持続しないと、できるものではない。しかし、彼はものの見事にそれをやってみせた。



元気なころの保莉実さん。

死から4カ月後、保莉実著「ラディカル・オーラル・ヒストリー：オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践」が御茶の水書房から出版された。その寄贈本を手にした時の感動は、生涯忘れまい。本の内容は、通算2年近くノーザン・テリトリーのアボリジニの村に住み込んでのフィールドワークに基づく、彼の研究の集大成。学術的とはいえ、彼の人柄そのままにユーモラスに、わかりやすく書いている。

そこに描かれるアボリジニの歴史観は、私たちの常識や既存概念を打ち破るものだ。例えば、ケネディ米大統領が彼らのムラにやってきたとか、キャプテン・クック以前にアボリジニの前に現れたイギリス人は猿の末裔だったとか。通常いう「史実」とはおおよそかけ離れたものも少なくない。このような言説は従来、学者たちから「神話」や「民話」、あるいは与太話扱いされ、歴史研究の対象としてほとんどまともに取り上げられてこなかった。

保莉さんは、それもアボリジニの「歴史実践」だと捉えた。そして、こう

した歴史観が語り継がれる由来やそれを生み出す彼らの世界観を、実証済みの史実も踏まえて徹底分析した。私見では、彼の論文や本は、先住民の大地を侵略した側の白人を中心とする過去あまたのアボリジニ研究に対する非白人研究者の異議申し立てであり、果敢な挑戦だった。生前、多くを学んだアボリジニの長老から「大地がおまえをここに呼んだ」と言われたそうだが、彼は大地の求めに応じてそこに魂を預けた。だから、周囲の人々の心の中では、彼の魂は今も輝き続けている。

翻訳・出版を全面支援した塩原良和・シドニー大学研究員が、この本を定価の2割引(送料など込みで32ドル)で本誌の読者にお分けする。塩原さんの連絡先は、shioabarayoshikazu@hotmail.com また、保莉さんの業績、記念奨学基金、新聞連載記事などを紹介するサイトは、<http://www.hokariminoru.org>

保莉さんが好きだったフレーズを最後に紹介したい。「『人生なるようにしか、ならない』などと言って、シニカルになっている暇などないのだ。自由で危険な広がりの中で、一心不乱に遊びぬく術を学んでゆこう」。